## テノール

## マーク・パドモア

## Mark Padmore

　ロンドン生まれ。クラリネットを学んだ後、合唱の奨学金を得てケンブリッジ大学キングス・カレッジに進み、優等学士学位を授与された。深い洞察に富んだ解釈、確かな様式の把握、流れるような自然な歌唱は世界中で賞賛されており、リサイタル、オペラ、現代音楽の各分野で優れた才能を発揮している。とりわけJ.S.バッハの受難曲の演奏で定評があり、エヴァンゲリスト（福音史家）として、ピーター・セラーズ演出による「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」（サイモン・ラトル指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団）に出演し、大きな注目を集めた。  
　オペラでは、ピーター・ブルック、ケイティ・ミッチェル、マーク・モリス、デボラ・ワーナーら現代屈指の演出家たちとコラボレーションを重ねている。最近では、オールドバラ音楽祭およびロンドンでハリソン・バートウィッスルの《The Corridor》《The Cure》に出演したほか、グラインドボーン音楽祭でブリテンの《ビリー・バッド》ヴィア艦長役と「マタイ受難曲」エヴァンゲリスト役を任されている。また、ロイヤル・オペラ・ハウスでのジョージ・ベンジャミン作曲《Written on Skin》（天使/ジョン役）にも出演。今後は、タンシー・デイヴィスとトーマス・ラルヒャーがパドモアのために書いた作品の初演が控えている。  
　コンサート活動にも積極的で、世界一流のオーケストラと共演を重ねるパドモアは、2016/17年シーズンのバイエルン放送交響楽団アーティスト・イン・レジデンスとして活躍。2017/18年シーズンには、ベルリン･フィルハーモニー管弦楽団で同様のポジションに就任する。エイジ・オブ・エンライトメント管弦楽団とは、共同企画としてバッハ「ヨハネ受難曲」「マタイ受難曲」を取り上げたほか、ブリテン･シンフォニアとも定期的に共演している。  
　世界各地でのリサイタルも絶賛を博しており、シューベルトの三大歌曲集をアムステルダム、バルセロナ、バーミンガム、ロンドン、リバプール、パリ、東京、ウィーン、ニューヨークで演奏した。リサイタルのパートナーには、クリスティアン・ベズイデンホウト、ジョナサン・ビス、イモージェン・クーパー、ジュリアス・ドレイク、ティル･フェルナー、サイモン・レッパー、ポール・ルイス、ロジャー・ヴィニョールズ、アンドリュー・ウェストら優れた音楽家たちが名を連ねる。また、サリー・ビーミッシュ、ハリソン・バードウィッスル、ジョナサン・ダヴ、トーマス・ラルヒャー、ニコ・マーリー、アレック・ロス、マーク=アンソニー・ターネジ、ヒュー・ワトキンス、ライアン・ウィッグルスワース、ハンス・ツェンダーといった作曲家が、パドモアのために作品を作曲している。  
　録音は多数あり、代表的なディスクに『ベートーヴェン：ミサ・ソレムニス』『ハイドン：天地創造』（共演：ベルナルト・ハイティンク指揮バイエルン放送交響楽団／BR KLASSIK）、『ベートーヴェン、ハイドン、モーツァルト：歌曲集』（共演：ベズイデンホウト／ハルモニア・ムンディ）がある。ハルモニア・ムンディからリリースされた『ヘンデル：アリアと場面集』（共演：アンドルー・マンゼ指揮イングリッシュ・コンソート）はBBCミュージック・マガジン賞声楽部門、『シューベルト：冬の旅』（共演：ポール・ルイス）はグラモフォン賞2010独唱部門、『シューマン：詩人の恋』（共演：ベズイデンホウト）はエディソン・クラシック・アワード2011、『ブリテン：セレナード＆ノクターン、フィンジ：ディエス・ナタリス』（共演：ブリテン・シンフォニア）はエコー・クラシック賞2013をそれぞれ受賞している。  
　現在、セント・エンデリオン夏音楽祭（コーンウォール）芸術監督。